

体験談

派遣先

インド

インド留学を振り返って

第二回生 安井 隆同

(浄土宗乗雲寺住職)

世界のあらゆる文明、文化、政治、経済、宗教、学問、人類のいとなみは、時代の流れとともに、どこかにかたより、こだわり、とらわれて、本来あるべからざる方向に流れ、混迷の一端を辿る。その時に、我々は、そのもの自体の根源に立ち戻り、初心に帰ることが最良で最上の道である。

現在の世界の諸宗教と世界の諸現状を眺めてみると、世界は益々小さくなり、それを取り囲む諸問題は、より一層大きく複雑になる一方である。

思い返すと、二十歳くらいまでは自由気まま、放埒ほうちやうな人生を送っていた。その実、何をしていても虚しく、やがて、人生とは何か、なぜ生きているのか、自分とは何者か、命とは何なのかと考え悩み苦悶する日々がつづいた。

私は、神も佛も一切信じていませんでしたが、ふと佛教にはその答えがあるような気がして、

佛敎大学で学び、勢いで住職資格も得た。

縁あり枚方市の浄土宗成雲寺の老尼僧住職（七十六歳）と暮らし、法務の手助けしを住職となった。けれども自分自身には、確たる信仰も信念もないまま、覚えたての経を誦し葬式、法要、法務に明け暮れ、御布施の多少に一喜一憂する愚かな僧の営みであった。一方では、心の内で、これでお前は僧か住職かと煩悶し、浴びるように大酒を呑む毎日だった。このままでは廃人になり一生後悔するぞとの思いに至り、今、ここで「ほんまもんほんまもんの僧」になる以外の道はないと確信するに至った。

そんな時、浄土宗大本山百萬遍知恩寺、法主、林靈法猊下とインド佛蹟巡拝する縁を頂いた。林法主の信仰信念理念に満々ちた現地での力強い伝道説法を拝聴し、釈尊入涅槃の地、クシナガラの闇夜に立ち涅槃堂に額づいたとき、ああ、このインドの大地には何か、尊いものがある
と……全身に何か熱いものが走った。

願わくば、このインドの大地、佛蹟を釈尊とともに語らい合いながら悠久の時の流れに身を委ねて行脚しようとした。釈尊と私との間には、どんな学者も学問も、高僧も挿まないで、釈尊と直々に対坐させて頂き、今現在説法の座に……との夢や希望で体を熱くしたのである。

そうした時、前住職の老尼（八十一歳）が夕方まで元気で私と会話していたのに、その夜に

眠るがごとくに大往生された。このことがあり、私は心おきなくインドに旅立てることとなり、住職を辞任し、自分のすべてをかけ、無一物になって求道する決心がついたのである。

人に委ねられるものはすべて委ね、三衣一鉢でインドへと旅立ったのである。(昭和五十八年一月、三十三歳)。

すべてをば ゆだねしのちの

命をも 佛にあずけ

かるく歩まん

インド出達の朝の私の詠である。

インドに長期滞在して釈尊の佛蹟をゆっくり行脚するためには、ビザの関係でインドの大学に籍を置くことが最良で、縁ありカルカッタ大学の博士課程で原始佛教哲学の研究をする事となった。そして大学のすぐ近くの佛教寺院の本山(マハボデイソサイテイ)でインド、スリランカ、バングラデイシユの僧とともに僧院生活をさせて頂くこととなり、五年間の最高にめぐまれた留学生活を送る事ができた。

最後の二年間は、善光寺留学僧に選ばれ、善光寺前住職、黒田武志理事長が、インド訪問の際にはカルカッタの私を激励下さり、その事で本気で研究生生活に入り、おかげさまで博士号を

授与され帰国。すべてのすべてに感謝、感謝、感謝、感謝で涙です。

私の佛蹟行脚は四回におよんだ。第一回はブツダガヤ——ラジギール——ナーランダ——パトナ——バイサリ——クシナガラまでの行脚であった。その一日めと二日めの旅日記を紹介しよう。

●昭和五十八年十二月十二日（月）

手甲脚絆に網代笠、錫杖、雲水衣に身を包み頭陀袋に鉄鉢を入れ、午前十時四十五分、釈尊成道の地ブツダガヤ大塔のある、印度山日本寺の駐在僧である溍本師（浄土真宗）、島村師（曹洞宗）、中野師（浄土宗）、長谷部氏（事務長）に見送られ出発する。旅立ちにあたり長谷部氏が、日本から持参したおいしいお茶を入れて、願って下さる。

感謝の心で、釈尊の最後の旅、入涅槃の地クシナガラをめざしてブツダガヤを後にし、二蓮禅河ぞいの道をガヤ方向に歩む。右側には乾期で水のほとんど流れていない二蓮禅河、左側には、のどかな田園が広がり、所どころで牛二頭に木製の鋤を引かせてバシツバシツと鞭打つて田を耕している。道端では、素足の子供達が戯れ、にわとり、ぶた、やぎ、犬、牛などが放し飼いにされ悠々として、どこからともなく小鳥の美しいさえずりが聞こえる。通りかかった馬車の上から、どこまで行く、乗れと声をかけてくれる。

釈尊が六年間苦行された前正覚山が見えてくる。遙拝し木陰に腰をおろす。実にさわやかな風だ……。歩くき出し、道端の屋根もないチャイ屋（茶屋）で一杯のチャイ（ミルクテイ）とパン一個（一ルピーナパイサ）約二十二円の昼食を頂き、とほとほと歩く。夕方にガヤ駅の近くまで来ると足腰が痛くなる。今夜は、駅で寝ることにし、駅前のチャイ屋でチャイ、トースト、オムレツ、（三ルピーナパイサ）約七十四円の夕食を頂き、駅の雑踏の中に身を沈める。何んとなく淋しいような、うれしいような、たいくつなような、充実しているような変な気持ちになってくる……。夜中に何度も目が覚める。回りに多くのインド人がごろごろ寝ている。

●十二月十三日（火）

五時ごろに目覚る。まだ暗い。インドの朝は早く、あたりはうす暗いのに、どこも美しく掃き清められている。すがすがしく踊りだしたくなるような気持ちで歩き出す。川があり橋があり、その露店でバナナ二本、小さなリングゴ二つ（三ルピー）約六十円を買い歩きながら食べる。これが朝食である。

のんびり歩いていると人力車が来て、どこまで行く、乗れと言う。お金が無いと言うと、ただでいいと。私は日本の修行僧で、釈尊の聖地を行脚しているんだと説明すると、了解したらしく、ニッコリ笑い手を振って先に行く。のどかな田園風景である。歩けども歩けども……

民家もなにもない……お腹もすいて、ふてくされて空を仰いで道端に寝ころぶ、道行く人が心配して、どうしたと寄つて来る。少し元気がもどり歩きはじめる。

遠くの田で稲刈りをしているのが見える。農家で育った私は、父母と田んぼで、おにぎりを食べた幼少の頃を想い出す。それにしても、腹へったなーあーアア。トラックが数台とまっている茶店があつた。チャイとオムレツ、チャパティを頂き、コップ一杯の水を飲み一息つく、店内の縄で編んだ腰かけベッドに横たわり、いつの間にか寝てしまう。目覚めると夕方だった。ここで一夜の宿をたのむ。イエル村のシングさんの茶店である。時々トラックの運転手、助手が食事したりチャイを飲んで休んでいる。

太陽が真赤に燃え地平線に沈むと、ランプが灯され、気温も下がり肌寒くなり、足腰もほどよく痛み、敷きつめたわらの中に身を横たえ、心豊かに眠りにつく。夜中に何度か目が覚めると、トラック野郎が回りに多く仮眠している。わらの中は温かい……。

三日目も、広大なインドの大地を歩きつづけるだけだ。「前には真直な道が天までつづき、後ろを振り返ると一筋の道」と日誌に残されている。

吾れはただ 佛たずねて歩くのみ

この遠き道 犀の角のごとく

いにしへの釈尊 吾れに生き

吾れを生かす とこしえに

釈尊の聖地を行脚している間、私はたえず自問自答していた。それは、佛教に出会う前の繰り返しでもあった。

生命とは、いかなるものか？、なぜ人は、生きているのか？、自分とは、何者なのか？、佛さんは、いるのか？、釈尊は、どんな存在だったのか？、……。

釈尊の聖地行脚で得た事とは、自分が信じようが信じまいが、佛さまは常住であり、極楽浄土、地獄もあり、地獄の底を突き破った所に極楽浄土がある。自分とは、佛さまの命を命として頂いて、ただ許されて生かされ生きているのであり、佛さまの思し召のままに素直に、明るく正しく仲良く生きるのみである。佛さまも釈尊も、常に自分とともに生きていて下さる。

佛教は、あくまで佛の教えそのものであり決して思想、哲学、学問ではない。そんなものを乗り越えた、衆生が生きていくための大自然の法則節理にそった実践道そのものである。

釈尊は、決して思想家でも哲学者でも佛教学者でもなく、ただ佛を信じ、佛の道を求道し、

その教えを実践して歩み伝えた伝道者であった。

今の日本佛教界は、佛教思想家、佛教哲学者、佛教学者ばかりで混迷の一途を彷彿している。求道者なき、伝道者なき佛教になっている。まさに「学」栄えて「道」滅ぶ佛教界である。

学なき求道は盲目であり、求道なき学は不具である。

今こそ日本の佛教界は、各宗派の教義はもちろん大事だが、あまり宗我にとらわれず、各宗祖を通して釈尊に帰るべき時ではないでしょうか。

私は、インドの釈尊の佛蹟行脚以来、佛道を歩む、実践僧、求道僧、伝道僧をこれからの佛教界に一人でも多く遺していける求道僧、伝道僧でありつづけたいと……。

求むれば 求むるほど

道は遠くなる されどこの道を行く



(上) ブッダガヤの藩王マハンタ師と
(下) 靈鷲山でチベット僧と法要



靈鷲山でチベット僧に法話